

図書館将来計画懇話会 報告書

参考資料

〈公開版〉 2012.3

学内資料

図書館組織図・職員一覧 *¹

同レベルあるいは競合大学との比較

学生・院生の貸出冊数からの分析（表・グラフ）

マップ：長久手・館内配置の変更

大塚英揮「大学図書館に期待される機能は何か」に関する一考察

伊藤真理「私なりの現状理解 提案」

議事関連 *²

発言記録 *²

学外資料 *³

山内祐平「ラーニングコモンズと学習支援」『情報の科学と技術』（61巻12号）
<<http://ci.nii.ac.jp/naid/110008799212>>

文部科学省

科学技術・学術審議会学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会

『大学図書館の整備について（審議のまとめ）：変革する大学にあって

求められる大学図書館像』

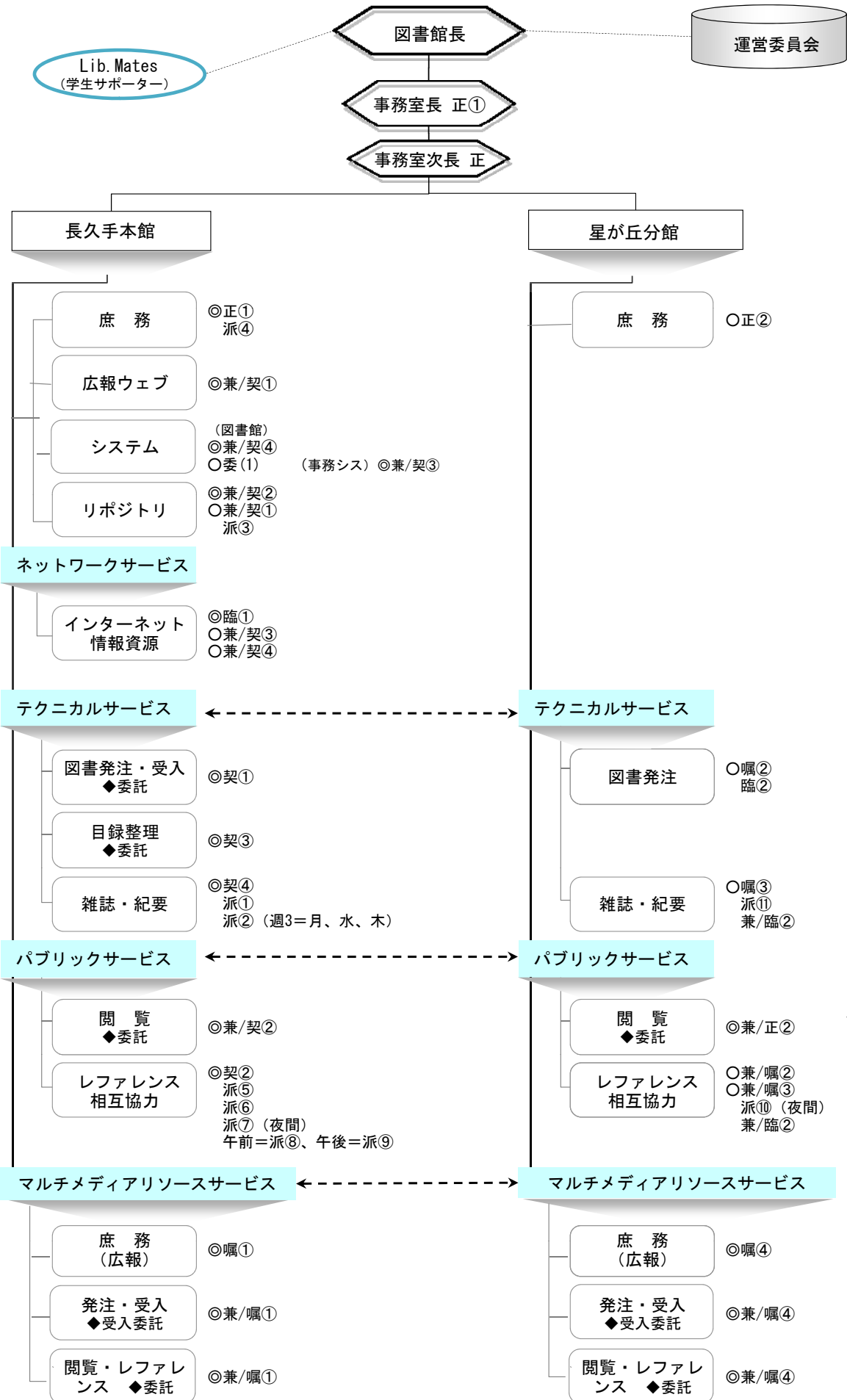
<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm>

→PDF版【2.7MB】

注●公開版の変更点（v.2；2012.3.30）

- 1 「図書館組織図・職員一覧」は、固有名称等を変更した。
- 2 タイトルがグレーの文書は、非公開とした。
- 3 学外資料は、リンクによって資料入手の案内をした。

図書館組織図



平成23年度 図書館職員一覧

2011.6.20 現在

【長久手本館】

○チーフ ◇委託リーダー

職名	スタッフ名	担当業務	備考
館長	図書館長		
事務室長	○正①	事務総括(長久手・星が丘)	
部門スタッフ	○契①	図書発注受入 兼/広報 兼/リポジトリ	
	○契②	レファレンス 兼/閲覧 兼/リポジトリ	
	○契③	目録 兼/インターネット情報源	兼/事務システム
	○契④	雑誌 兼/インターネット情報源 兼/システム	
派遣 A社	派①	雑誌・紀要	
"	派②	雑誌・紀要	週3日勤務(原則 月、水、木)
"	派③	リポジトリ	
" B社	派④	庶務・文書・経理	
" A社	派⑤	レファレンス・相互協力	
"	派⑥	レファレンス・相互協力	
"	派⑦	レファレンス・相互協力(夜間)	授業期=12:30~20:30、授業期以外=9:00~17:00
"	派⑧	レファレンス・相互協力	授業期のみ=9:00~13:00
"	派⑨	レファレンス・相互協力	授業期のみ=13:00~17:00
臨時	○臨①	インターネット情報資源	週4日=10:00~16:00(原則4~8月、10~2月のみ)
委託 C社	委(1)	システム管理(業務委託)	
委託 B社	◇委(2)	発注・受入、 目録整理(業務委託) *サブリーダー	
"	*委(3)		
"	委(4)~(10)		
委託 A社	◇委(11)	閲覧(業務委託)	勤務シフト表に従い、カウンター業務等に従事する。
"	委(12)~(16)		

〈長久手マルチメディアリソース室〉

職名	スタッフ名	担当業務	備考
嘱託	○嘱①	業務事務全般(庶務・広報・発注受入、 閲覧・レファレンス)	
委託 A社	◇委(17)	受入・閲覧・レファレンス等 (業務委託)	勤務シフト表に従い、業務に従事する。
"	委(18)~(21)		

【星が丘分館】

職名	スタッフ名	担当業務	備考
事務室次長	○正②	星が丘分館事務総括	
嘱託	嘱②	発注受入 兼/レファレンス・相互協力	
嘱託	嘱③	雑誌・紀要 兼/レファレンス・相互協力	
派遣 A社	派⑩	レファレンス・相互協力(夜間)	授業期=12:30~20:30、授業期以外=9:00~17:00
"	派⑪	雑誌・紀要	
臨時	臨②	レファレンス、業務全般補助	週4日=9:00~16:00(4~7月、9~1月、3月のみ)
委託 A社	◇委(22)	閲覧(業務委託)	勤務シフト表に従い、カウンター業務等に従事する。
"	委(23)~(26)		

〈星が丘マルチメディアリソース室〉

職名	スタッフ名	担当業務	備考
嘱託	嘱④	業務事務全般(庶務・広報・発注受入、 閲覧・レファレンス)	
委託 A社	◇委(27)	受入・閲覧・レファレンス等 (業務委託)	勤務シフト表に従い、業務に従事する。
"	委(28)~(29)		

略称●正=正職員 契=契約職員 嘱=嘱託職員 臨=臨時職員 派=派遣社員 委=委託社員

同レベルあるいは競合大学との比較(蔵書数の降順)

大学名	学生数	蔵書数	年間受入冊数	年間資料費 (千円)	1人あたり蔵書数	1人あたり資料費	1人あたり年間貸出数	座席数	1席あたり学生数	朝日 ランク	
愛知県	名古屋大学	9,700	3,072,003	150,760	944,140	316.7	97,334	11.3	1,043	9	
	愛知大学	8,811	1,421,769	24,678	239,082	161.4	27,134	7.3	709	12	
	愛知学院大学	12,227	1,021,878	21,109	254,051	83.6	20,778	4.2	1,500	8	
	名城大学	15,404	1,014,698	15,869	307,787	65.9	19,981	4.1	1,053	15	
	中京大学	13,286	905,936	31,569	200,837	68.2	15,116	6.0	1,548	9	
	名古屋市立大学	3,372	828,266	12,495	171,474	245.6	50,852	10.6	515	7	17
	南山大学	9,532	745,014	15,079	175,609	78.2	18,423	10.1	1,256	8	
	愛知県立大学	2,782	587,362	10,411	47,801	211.1	17,182	11.7	416	7	60
	日本福祉大学	4,535	560,276	11,589	114,593	123.5	25,269	9.0	-	-	
	金城学院大学	5,303	506,509	12,508	80,488	95.5	15,178	5.8	427	12	
	中部大学	9,425	447,923	16,754	214,042	47.5	22,710	3.9	-	-	
	椋山女学園大学	5,720	422,024	11,076	67,635	73.8	11,824	7.9	644	9	
	愛知淑徳大学	8,119	355,209	14,051	114,570	43.8	14,111	8.4	631	13	
	名古屋学院大学	5,383	353,524	5,002	62,926	65.7	11,690	3.2	599	9	
名古屋商科大学	3,840	215,898	1,499	30,923	56.2	8,053	3.2	-	-		
他地区	早稲田大学	43,634	5,163,110	95,533	1,201,520	118.3	27,536	15.5	5,278	8	
	首都大学東京	7,048	1,828,833	37,890	177,759	259.5	25,221	10.1		45	
	立教大学	18,975	1,743,400	43,911	503,979	91.9	26,560	9.1		92	
	青山学院大学	17,529	1,723,944	35,561	396,286	98.3	22,607	10.8			
	学習院大学	8,066	1,643,374	31,742	488,432	203.7	60,554	12.7		8	
	専修大学	18,250	1,542,481	43,447	449,898	84.5	24,652	5.4			
	國學院大学	9,311	1,434,920	26,091	228,613	154.1	24,553	8.0			
	大東文化大学	13,096	1,365,442	31,261	239,772	104.3	18,309	6.9			
	神奈川大学	18,388	1,352,877	39,324	358,094	73.6	19,474	4.7			
	関東学院大学	11,637	1,275,965	28,805	273,918	109.6	23,539	4.1			
	成蹊大学	7,779	1,189,564	40,392	244,819	152.9	31,472	13.2		11	
	上智大学	10,509	1,163,927	31,246	525,664	110.8	50,020	12.5		58	
	駒澤大学	15,286	1,163,495	16,912	211,576	76.1	13,841	4.5			
	明治学院大学	12,236	1,118,918	21,785	323,150	91.4	26,410	6.2			
	創価大学	7,787	1,041,420	27,741	196,117	133.7	25,185	22.5			
	西南学院大学	7,960	1,035,424	21,940	264,618	130.1	33,243	7.9		102	
	京都産業大学	13,066	1,031,790	18,804	317,356	79.0	24,289	9.3			
	甲南大学	9,030	980,148	13,062	153,138	108.5	16,959	4.0			
	佛教大学	6,371	925,941	36,972	173,113	145.3	27,172	6.6		29	
	玉川大学	7,658	890,928	13,379	81,489	116.3	10,641	6.6			
	立正大学	10,325	889,609	10,098	189,690	86.2	18,372	3.2			
	九州産業大学	11,082	783,629	15,109	155,446	70.7	14,027	3.2			
	国土館大学	13,879	753,409	26,967	186,688	54.3	13,451	3.1			
	広島修道大学	6,061	736,406	17,066	166,676	121.5	27,500	5.8		94	
	明星大学	7,521	728,000	5,280	63,289	96.8	8,415	4.5			
	東京国際大学	5,951	657,182	18,093	122,996	110.4	20,668	10.2			
	文教大学	8,609	639,779	15,031	140,739	74.3	16,348	12.5			
拓殖大学	10,365	541,966	12,966	187,165	52.3	18,057	2.5				
桜美林大学	8,639	514,251	13,977	131,565	59.5	15,229	7.2				
城西大学	7,980	413,128	7,298	128,901	51.8	16,153	1.3				
合計	418,133	40,496,436	905,839	9,162,764							
平均	9,724	941,778	21,066	213,088	96.9	21,914	7.3				
大学名	学生数	蔵書数	年間受入冊数	年間資料費 (千円)	1人あたり蔵書数	1人あたり資料費	1人あたり年間貸出数	座席数	1席あたり学生数	朝日 ランク	

文部科学省「規模別大学一覧」のうち、Bランク(4-7学部)から任意に選んだ。

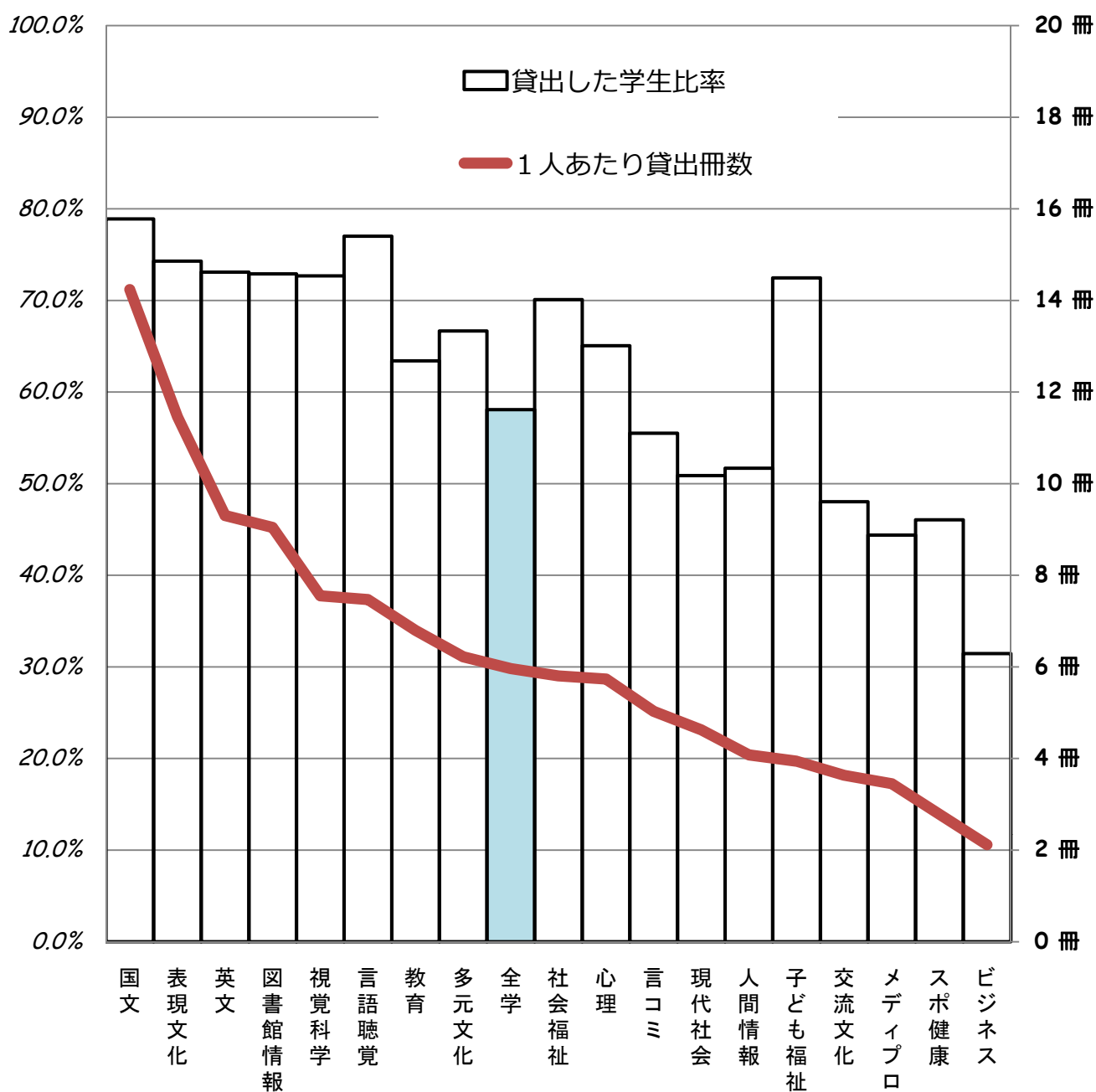
学生数5,000人以上、南関東および中部を中心に

数値は、朝日新聞社『大学ランキング2012』『日本の図書館2010(資料費のみ)』による

学生・院生の貸出冊数からの分析(2010年度)

学部	学科、専攻名	和書冊数	洋書冊数	合計	1人あたり冊数	学生総数	貸出した学生実数	貸出した学生比率	貸出学生1人あたり冊数
文学部	国文学科	6,197	11	6,208	14.2	436	344	78.9%	18.0
	英文学科	3,663	245	3,908	9.3	420	307	73.1%	12.7
	図書館情報学科	3,428	9	3,437	9.0	380	277	72.9%	12.4
	教育学科	3,260	9	3,269	6.8	481	305	63.4%	10.7
人間情報学部	人間情報学科(1のみ)	1,087	2	1,089	4.1	267	138	51.7%	7.9
心理学部	心理学科(＋コミ心学科)	4,389	10	4,399	5.7	767	499	65.1%	8.8
メディアプロデュース学部	メディアプロデュース学科(1のみ)	1,352	0	1,352	3.4	392	174	44.4%	7.8
健康医療科学部	医療貢献学科言語聴覚学専攻(＋医福)	1,300	0	1,300	7.5	174	134	77.0%	9.7
	医療貢献学科視覚科学専攻(＋医福)	1,463	2	1,465	7.6	194	141	72.7%	10.4
	スポーツ・健康医科学科(1のみ)	457	2	459	2.8	165	76	46.1%	6.0
福祉貢献学部	福祉貢献学科社会福祉専攻(＋医福)	2,988	0	2,988	5.8	515	361	70.1%	8.3
	福祉貢献学科子ども福祉専攻(1のみ)	272	0	272	3.9	69	50	72.5%	5.4
交流文化学部	交流文化学科(1のみ)	1,443	32	1,475	3.6	406	195	48.0%	7.6
ビジネス学部	ビジネス学科	2,433	4	2,437	2.1	1,151	362	31.5%	6.7
現代社会学部	現代社会学科	4,948	15	4,963	4.6	1,073	546	50.9%	9.1
コミュニケーション学部	言語コミュニケーション学科	1,959	53	2,012	5.0	400	222	55.5%	9.1
文化創造学部	文化創造学科表現文化専攻	4,849	10	4,859	11.5	424	315	74.3%	15.4
	文化創造学科多元文化専攻	2,453	66	2,519	6.2	405	270	66.7%	9.3
学部生合計		47,941	470	48,411	6.0	8,119	4,716	58.1%	10.3
大学院	専攻名	和書冊数	洋書冊数	合計	1人あたり冊数	院生総数	特別貸出和書冊数	特別貸出洋書冊数	合計
文学研究科	国文学専攻	310	0	310	34	9	40	0	40
	図書館情報学専攻	72	2	74	8	9	2	0	2
教育学研究科	発達教育専攻	256	1	257	51	5	86	3	89
GCC研究科	GCC専攻	761	56	817	29	28	140	45	185
現代社会研究科	現代社会専攻	118	7	125	7	19	26	0	26
心理学研究科	心理学専攻	1,272	6	1,278	28	46	130	0	130
医療福祉研究科	ソーシャルサービス専攻	88	0	88	8	11	23	23	46
	コミュニケーション障害学専攻	191	8	199	22	9	29	2	31
文化創造研究科	創造表現専攻	173	0	173	16	11	20	0	20
ビジネス研究科	ビジネス専攻	40	0	40	8	5	7	0	7
	会計専門職専攻	2	0	2	1	4	0	0	0
コミュニケーション研究科	言語コミュニケーション専攻	99	0	99	50	2	4	0	4
院生合計		3,310	80	3,390	21	158	507	73	580

学生の貸出からの分析(2010年度)





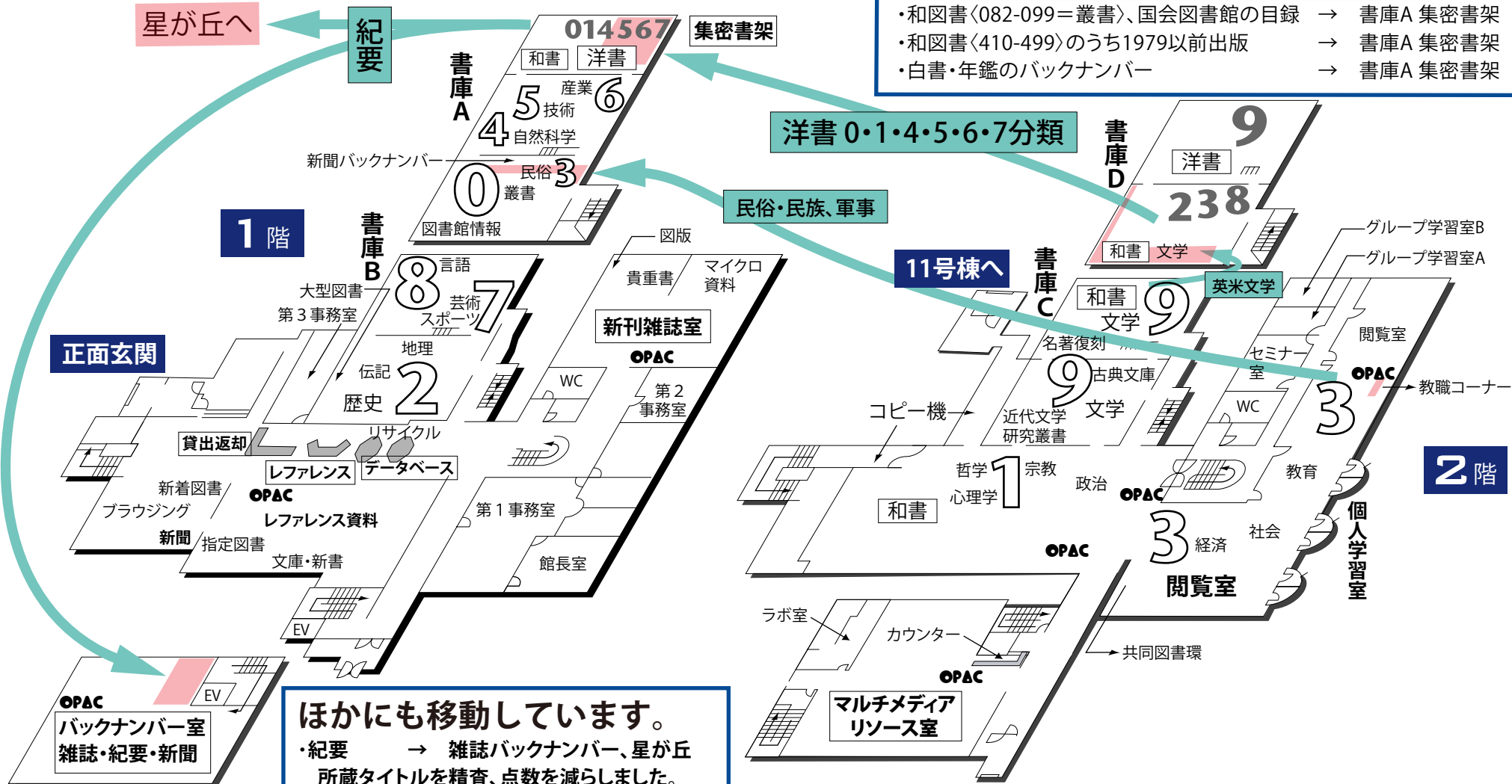
長久手・館内配置の変更

10

2010-6

次の資料を移動しました。

- ・書庫Dの洋図書<0・1・4・5・6・7分類すべて> → 書庫A 集密書架
- ・2階の和図書<380-399=民俗・民俗、軍事> → 書庫A
- ・和図書<930-999=英米欧などの文学> → 書庫D
- ・和図書<082-099=叢書>、国会図書館の目録 → 書庫A 集密書架
- ・和図書<410-499>のうち1979以前出版 → 書庫A 集密書架
- ・白書・年鑑のバックナンバー → 書庫A 集密書架



ほかにも移動しています。

- ・紀要 → 雑誌バックナンバー、星が丘所蔵タイトルを精査、点数を減らしました。
- ・年次別論文集・論説資料 → 星が丘
- ・教職コーナー → 2階(379の後)
- ・『東洋文庫』、『勉強社文庫』 → 各分類
- ・新着図書コーナー → ブラウジング

0123456789 は、分類番号です。
(和書:白抜き、洋書:灰色)



第2回 図書館将来計画懇話会 提出資料（平成23年9月20日）

「大学図書館に期待される機能は何か」に関する一考察

ビジネス学部 大塚英揮

0) はじめに

「大学図書館に期待される機能は何か」という問題に対し、顧客（学生）目線にできるだけ立ちながら、個人的に検討を行ってみた。その結果、次の図1に表される3つの機能が主たる機能として考えられるのではないか、という個人的な結論を得た。

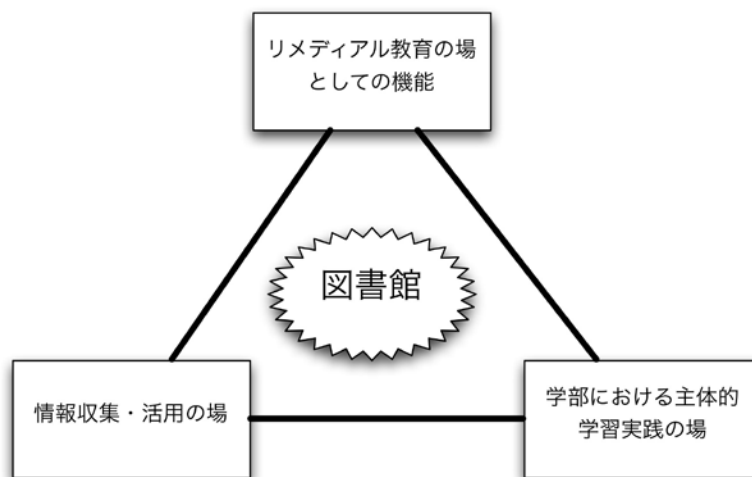


図1 図書館に期待される機能：顧客目線

1) リメディアル教育の場としての位置づけ

	①教わっており覚えている	②教わったが忘れた	③教わっていない	④自分で覚えた	合計	③+④
1) ノートの取り方	10	8	11	4	32	14 (44%)
2) メモの取り方	5	1	21	5	32	26 (81%)
3) レポートの書き方	2	0	29	1	32	30 (94%)
4) 小論文の書き方	8	13	10	1	32	11 (35%)
5) 勉強の仕方	15	4	6	7	32	13 (41%)

表1 リメディアル科目受講生の高校までのリテラシーの修得状況

上記表1は、辻洋一郎「中堅文科系大学におけるリメディアル科目はどうあるべきか」『桃山学院大学総合研究所紀要』35(3),p.35. から引用したものである。桃山学院大学で実際に大学入学時点に調査を行った結果、レポートの書き方、メモの取り方について

は8割以上が丁寧に教わった経験がなく、勉強の仕方についても4割の学生が教わった経験がないという悲惨な状況をこの結果から読み取ることができる。本学でもこのような学生は多いと思われる。特にビジネス学部では、本を読む習慣が全くない学生も多く、このような状況で図書館の蔵書を増やし、高機能化しても大きな学習効果を期待することはできないだろう。

ビジネス学部では新生ゼミナールという半期1コマの科目を通じて、レポートの書き方や勉強の仕方を教えており、また全学的にも日本語教育科目の拡充により、文章作成の基礎については少しずつ学習環境が整ってきているというのも事実である。しかし、大学入学時まで、本を読み、メモをとり、文章を書くという習慣を全く持たなかった学生が、単発の授業を2つか3つ受けただけで、大きく変わるとは期待できない、というのもまた事実であろう。

そこで、資料収集→レポートのまとめ方という基本的なアカデミック・スキル向上を目指す科目との連携を強化（学部との連携のところでも再度触れる）すると同時に、リメディアル教育担当のスタッフを置く（院生のバイト？本学の院生のレベルでは無理？なら学部から人を出してもらおう？回り持ちで）などして、リメディアル教育実践の場として図書館を位置づける方策はないものかと一人妄想してしまいました。

2) 学部との連携

リメディアル教育に関する項目のところで触れたように、図書館の機能強化に関するプランを図書館単体で描いていくのは、現在の学生の知的水準ではもはや無理と言わざるを得ない。図書館の蔵書を増やせば、ほっておいても学生は図書館に本を読みに行くだろう、というのは、現状ではほとんど期待できない状況なのである。

このような状況下で、図書館の機能強化を訴える前にまずなくてはいけないことは、学部教育と図書館の連携をより強化することであると考えられる。例えば、学部の授業でレポートが出ることが最近は多くなってきているが、その場合、調べ方などを詳しくレクチャーせず、学生に完全丸投げでレポートを課し、受け取ったレポートについても何らフィードバックなしで終わらせる場合が多々見られる。調べ方、まとめ方がわからない学生に対し、事前レクチャーなしでレポートを課せば、その結果、大量のネットの切り貼りレポートが発生したとしてもそれは仕方のないことと言わざるを得ない。教員からの事後的なフィードバックも期待できない状況では、さらにその傾向が強まるだろう。

レポートを出す場合に、どのデータベースを利用するのか、代表的なキーワードは何

か、図書館のどの分野の本が参考になるのか、メモはどうとればいいのか、などの基本事項をきちんとポータルを通じて提示し、図書館側も問い合わせを受けたときに、科目名で検索すれば、レポートで必要となる調査項目などの基本事項にアクセスできる、というようにするだけでも、もしかしたら少しはプラスの効果が期待できるかもしれない。

またレポートが集中的に出されるシーズンには、図書館に相談コーナーを設けて当番制で学部から人が出てもらうなどして、学生に対するサポートをより強化することも必要なのではないかと考える。本が一人では読めない学生もいるので、わからない日本語を聞ける人がいる、というだけでも、学生にとってはありがたいことなのかもしれない。

3) 情報収集・活用としての機能

この夏休みを利用して、「ラーニングコモンズ」に一番最初に取り組んだ事例として知られる（らしい）、横浜国立大学の中央図書館に見学に行つて参りました。見学して一番強く思った感想は、「レポートや論文を作成したり、グループで研究したりする場合の使い勝手が、淑徳の図書館に比べて格段に良い」という点でした。

まず、レポートや論文を作成する、すなわち図書館で得られた情報を活用する場合、淑徳では、本を一端借り出して、それを情報教育センター（または自宅）まで持っていかなければなりません。オープン利用でPC立ち上げて、ワードで文章打っていて、文献が足りないと思ったら、わざわざ歩いて図書館に出向き、そしてわざわざ本を借りてこないといけません。横浜国立の図書館は、図書館内にオープン利用可能なPCがたくさん配置されているため、図書館内でPC立ち上げて、文章打って、足りないと思ったら同じフロアから本を持ってきて、使用して、終わったら本棚に返しに行けばいい。レポートや論文で本を使う際の面倒さ、これが淑徳と横国ではだいぶ違うのではないかと感じました。

また、横浜国立の図書館は、グループで学習できる部屋が多数設けられています。



各部屋には、グループ学習用の机とPC、DVDを観賞できるモニタが配備されており、ガラス張りで中が見えるように設計されています。DVDのモニタが必要かどうかは別として、このようなグループ学習の場が淑徳には非常に少ないと感じます。（横浜国立大学の図書館には、このような部屋が13部屋ほど存在するようである。）長久手でも星ヶ丘でもコミホまたは食堂、それに加え廊下やエレベータ前に設置されたテーブルと椅子ぐらいしか、グループ研究の場が存在しない、というのが実情であり、グループ研究を積極的に行うゼミを持たれている先生は多かれ少なかれ、学習の場をどう確保するかに頭を悩ませているのではないのでしょうか。

また横浜国立大学は、図書館の入り口手前（入り口が2Fで1F Caféの中の階段を上って入る動線になっている）学生用のCaféがあり、それも入りやすい雰囲気高めするのに一役買っているのかな、と思いましたが、本当のところはよくわかりません。

4) さいごに

「大学図書館の本旨は研究に資することである」という意見もあると思います。顧客本位ではなく、アカデミックな視点で図書館の本旨について議論すべきであるというのも僕は正論だと思います。しかし、図書館単体の問題として予算強化を申請するのではなく、学部との連携の中で「リメディアル」や「学生のグループ活動のための場作り」といったより大きな問題の中で図書館の機能強化を論じていったほうが、予算強化の申請も通りやすいのではないかと個人的に感じています。 以上

人間情報学部 伊藤真理

9 / 20での発言の補足をしつつ、まとめ（大塚先生の資料や他委員からのご意見も反映しています）

■ 私なりの現状理解

（１）図書館が提供している利用者サービス

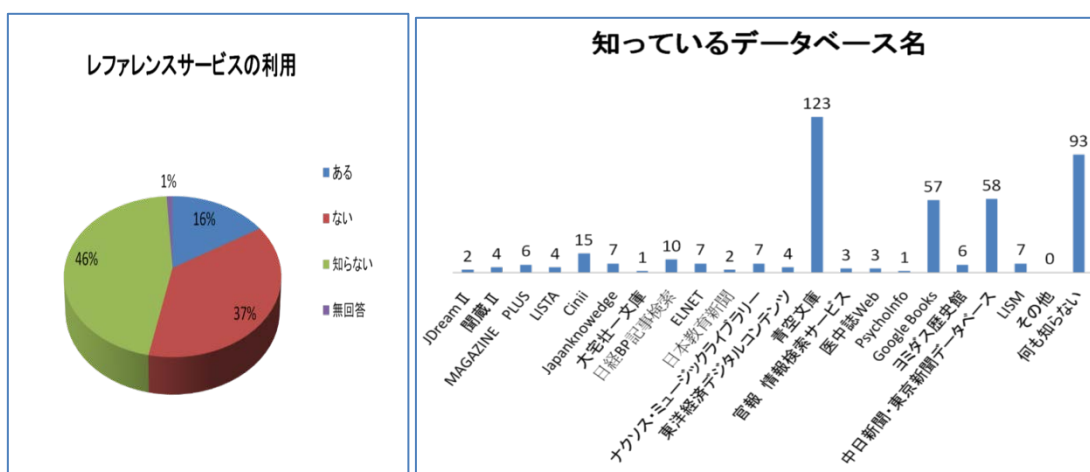
本学図書館は、例えば次のようなサービスを積極的に実施して、学生や教職員に対する利用教育に力を入れていると思います。

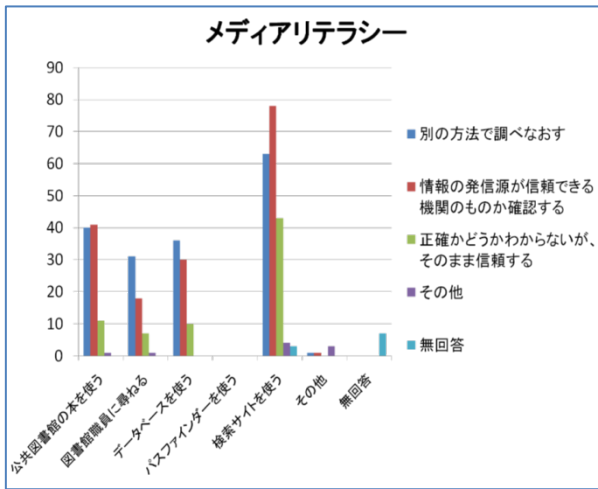
- ガイダンス：毎年工夫をして改善していらっしゃるのことがわかります
- 文献利用講習会（BI）：ゼミ単位での受講で、毎回学生が関心を持っているテーマに沿った内容を素材として事前準備を十分にしてくださっています
- パスファインダー：国内では本学図書館が先駆けとなったサービスですが、質量ともに徐々に充実してきていると思われます

（２）学生の図書館サービスの認知度

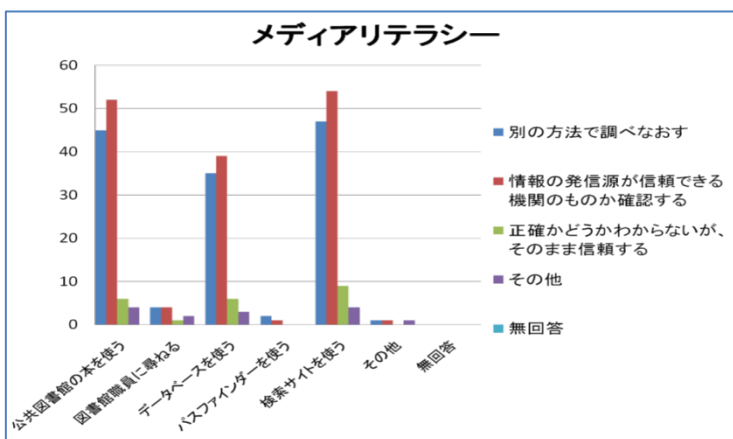
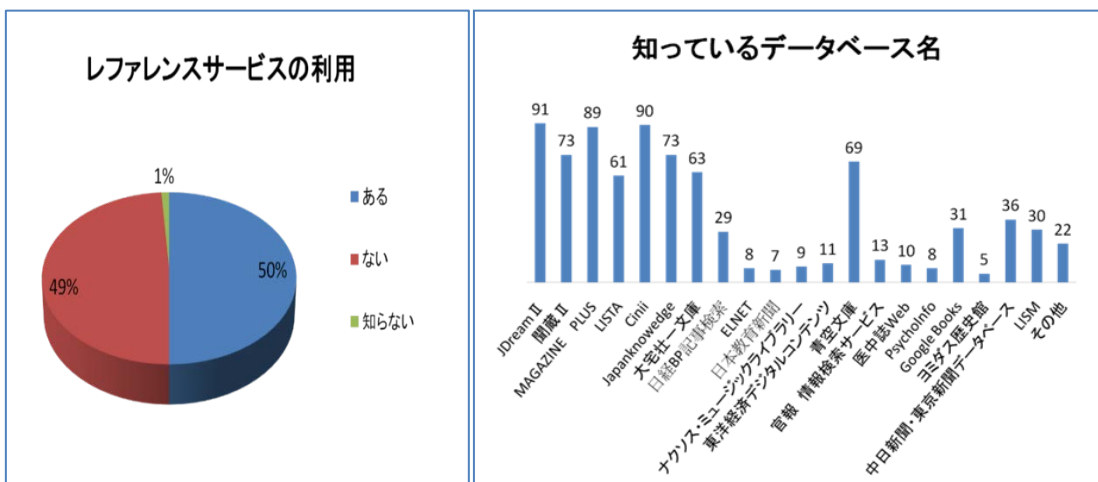
図書館が提供しているサービスに対して、学生はどの程度知っているのでしょうか。ゼミの活動の一環で、学生が簡単な調査を行っています（今年6月実施）のでご紹介します。なお、この調査は、図書館情報学に対する関心度、情報探索においてどの程度図書館を利用するか、検索で注意していることは何かを把握するためのものですので、図書館利用に直接関係しているものではありません。（裏が写っていて、書き込みも有りすみません）

【対象：人間情報学科1年235名】





【図書館情報学科 3 年 115 名】



残念ながら、図書館情報学科の学生も、パスファインダーやオンラインデータベース

の利用、および図書館の基本的なサービスであるレファレンスサービスに対して、十分に認識があるとはいえない結果となっています。

図書館では、昨年度から学生ボランティアによる活動が始まり、徐々に図書館への関心も高まってきており、とても喜ばしいことであると思います。とはいえ、Lib. Matesの募集についても、“知っていれば応募したのに”という声も聞きました。せっかくのサービスが活かされないのは残念です。上記結果も併せて考えると、図書館の熱意や活動が、学生にはいまだ十分伝わっていない部分もあるように思います。広報については、今後大いに期待しているところですが、10/4の図書館委員会では、早速探索講習会の広報があり、また各教員のレターケースにも配布してくださっており、うれしく思いました。

(3) 授業でのニーズ

○ 各学部での基礎ゼミ、基礎科目

9/20のミーティングでは、ビジネス学部、心理学部の例が紹介されました。人間情報学部の例もご紹介しました。

○ キャリアセンター

小川先生からご紹介があったように、企業の方を含めた学内外を対象としてインターンシップ報告会を実施するうえで、レポートをまとめるための基礎力、プレゼンテーション力が必要となるようです。そこでは、センター担当の教員によるかなりの量のサポートが大事であることがわかりました。

○ 日本語活用科目

全学基礎科目である日本語活用科目では、JapanKnowledge、新聞データベースなど図書館で契約しているデータベースを活用して、学生のレポート作成指導に取り組んでいるようです。

日本語活用科目は、全学部を対象として膨大なコマ数が開講されているため、図書館員ではBIのサポートができません。そこで、科目担当者に対する講習会を実施して、まずは教員サイドが図書館のノウハウを理解していただくことで対応されています。

■ 提案

(1) 図書館に求められる機能

上記で述べたように、図書館ではすでに利用者支援のための様々なサービスを実施し

ており、その基礎はできています。また、日本語活用科目での授業内容に見られるように、すでに図書館とうまく連携して、図書館サービスを活用しているという実績も積み上げつつあります。しかし、各学部の基礎ゼミで図書館を利用できるような体制には至っていません。

懇話会での意見交換による各学部の事情や図書館利用の現状理解を踏まえ、本学図書館の使命は、学生の自立支援を念頭に置いた情報リテラシー教育の場を提供することであると考えます。社会に向けて適切な情報発信ができるように、初年次に焦点をあてた学部での教育充実の支援が重要と思われれます。現在徐々に整備されつつある利用者教育をさらに発展させ、全学的な組織の中で機能できるような体制を整えていくことが肝要と思います。

情報リテラシー教育の強化は目新しいことではなく、大学図書館に求められる機能として、すでに指摘されていることです。本学学生の質、教育体制を基に図書館が求められる役割を検討していく中で、当該機能を遂行することが本学図書館に最も適切なことであろうと考えました。これはまた、大学が実行していくように求められているFD活動につながります。

大塚先生が指摘下さった「リメディアル教育」という視点で考えると、学内でリメディアル教育を担う基礎ゼミや日本語活用科目など複数の部署と連携しながら、基礎学力を学びつつさらに情報活用能力を伸ばすことを支援するために、図書館が機能することを期待しています。

(2) 望ましい体制

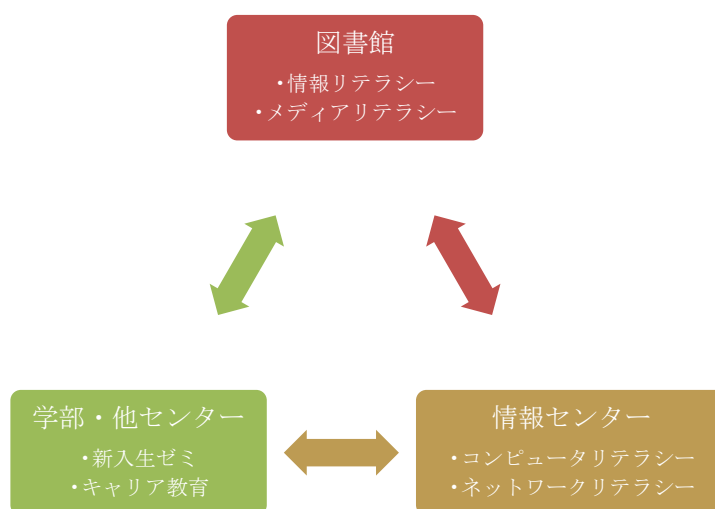
下図に示したように、図書館が(1)に説明した機能を発揮するためには、第一に学内他組織との連携をはかることが重要です。特に、学部・他センターでの授業やプロジェクトでの活動を支援していくことにより、図書館の全学的な位置づけや役割が明確になると思われます。

図書館では、各種のパスファインダーを作成・提供して下さっていますが、授業や学生の学習にどれだけ活用されているのかについて、私自身把握していません。ゼミ生の調査結果を見る限り、積極的とはいえないようです。図書館でのこうした努力を活かすためにも、授業との連携が欠かせません。

図書館と学部との連携の事例として、千葉大学があげられます。両者の連携の仲介として、近年“リエゾンライブラリアン”と呼ばれる立場の図書館員が活躍しています。主題専門知識を持ち、利用者サービスを行うサブジェクトライブラリアンとは異なり、高度な主題専門知識よりも各学部の授業運営に参加して図書館が可能なことを支援す

る役割を持つ図書館員です。主題専門知識が強く要求されないという点で、日本の環境になじみやすいように思います。

情報センターは、コンピュータリテラシーやネットワークリテラシーに関わる教育を実践していますので、図書館とうまくすみわけができています。さらに LAN 利用での協力を進めていくことによって、図書館でのオンラインデータベースの利用や支援を円滑に行うことができるでしょう。小・中規模程度の大学では、学内のセンター間の協力が不可欠です。本学よりも規模が小さいですが、組織間の壁を低くして実践している例として、お茶の水女子大があります。



また、この体制を支えるために、人材および施設面で改善が必要となります。

● 人材

学習の場としての図書館を実践するには、人的サポートが必須です。現在、レファレンス担当の専任職員は1名のみです。現在行われている図書館利用ガイダンス、文献(データベース)利用講習会は、非正規職員と他部署職員の援助により実施されているようです。館内の職員間の協力体制がとれていることが理解できます。しかしながら、学部および他センターとの連携や、学部授業への支援など、学内の他組織との円滑なコミュニケーションを実施するためには、専任職員による業務の遂行が必要で、かなりの業務量になることは容易に推測できます。このことから、情報リテラシー教育を実践していくための専任職員の増員が必須と考えます。

● 施設

現状では、図書館の施設には大きな制約があります。グループ学習室の不足、グループ学習室での PC 未設置、LAN 利用の制限、常時 20 人規模のセミナー実施が困難、等で

す。

そこで、LAN 利用を前提とする 20 人規模での DB 講習会実施では、情報センターと連携することによって対応ができないでしょうか。これが難しいということになれば、図書館が自前で行えるような施設を要求していかざるを得ないと考えます。さらに、図書館での PC 利用については、ノウハウも実績も豊富な情報センターのサポートを受けることが、円滑な業務運営につながると考えます。

(3) 利用者調査の必要性

冒頭で、簡単な調査結果を紹介しましたが、図書館が情報リテラシー教育の側面から全学的な支援をしていくには、もっと踏み込んだ調査を行って現状を把握することが必要です。必要と思われる調査は以下のとおりです。これらの調査を実施し、図書館ができることだけではなく、本学の学部教育において図書館が担うべき役割や期待されている役割を明確にしていくことが重要と考えます。

- 授業および課題作成での図書館利用（全学教員対象）：各学部での授業の現状と教員が希望することを把握する
- 図書館利用についての要望（学生対象）：現状での問題点を学生の視点から指摘してもらう

これまでの懇話会での意見交換の感触から、調査を通じて利用者ニーズに対応した図書館像を検討していく中で、“ラーニングコモンズ”も必然的に浮上してくるのではないかと思います。図書館の中に、単にグループで集まることのできる物理的空間を設置しても、期待される活用は望めないでしょう。ラーニングコモンズを有効に活用するためには、図書館を活用した研究活動や課題が、各学部の授業に関連して課せられることがなければなりません。また、グループ学習やグループ研究、ディスカッションを円滑に進めることができるように支援するスタッフが必要です。そうでなければ、おしゃべりの場と化すだけです。そのためにも、学部・センターとの連携が欠かせません。

以上